

糸結びテストによる被服指導の研究事例について (第2報)

性格との関連

荻野千鶴子・堀 逸子・池田恭子

Thread Knotting and Japanese Dress Making (II)

The Relation between Thread Knotting Tests and Personality

C. OGINO, I. HORI and K. IKEDA

緒 言

被服技能測定の一方法ともなる糸結びテストを行なって、児童・生徒の学業成績や性格などとの関連性をしらべ、技能指導により、学校教育における落ちこぼれの発見救出、或は性格向上への糸口としたいと考えてこの研究を進めている。

被服技能は練習により上達し、一度身につけたものは定着性のあること、また技能即ち糸結び目数の下位の者の多くは学業成績が悪く、上位の者との間には、担当者所見による性格に差のあることがわかったので、今回は妥当性のあると思われるY・G性格検査を行なって、その関係をしらべ結果が得られたので報告する。

方 法

表1 調査対象

種別	校数	学年	被験者		所在地
			男	女	
小学校	2	5	16	19	愛知県
		6	37	32	三重県
中学校	2	1		28	愛知県
		2		67	三重県
		3		45	
高校	1	1		41	三重県
		3		15	
大学	1	1		37	愛知県
		2		44	
計			53	328	
総計			381		

調査対象は、表1に示すように愛知県・三重県の小学校・中学校・高等学校・大学の児童・生徒・学生を対象に昭和51年9月から昭和52年2月にかけて糸結びテストを4回行ない、4回目の直後にY・G性格検査を実施した。

Y・G性格検査は質問紙法により小学校用は96問、中学校・高校・大学(一般)用は120問に対して解答を求め、これを一定法式に従って採点し、粗点の計算を行ない、性格プロフィール(図1)を作成して個々を診断するものである。

12項目の性格特性の得点(小学生は8点、中学・高校・大学生は20点を満点とする)が計算され、この因子の粗点の組み合わせにより情緒安定性など、中・高・大学生は6項目で計18項目、小学生は4項目で計16項目の調査を行った。

本調査は個人の性格の調査であり、正確を期するため

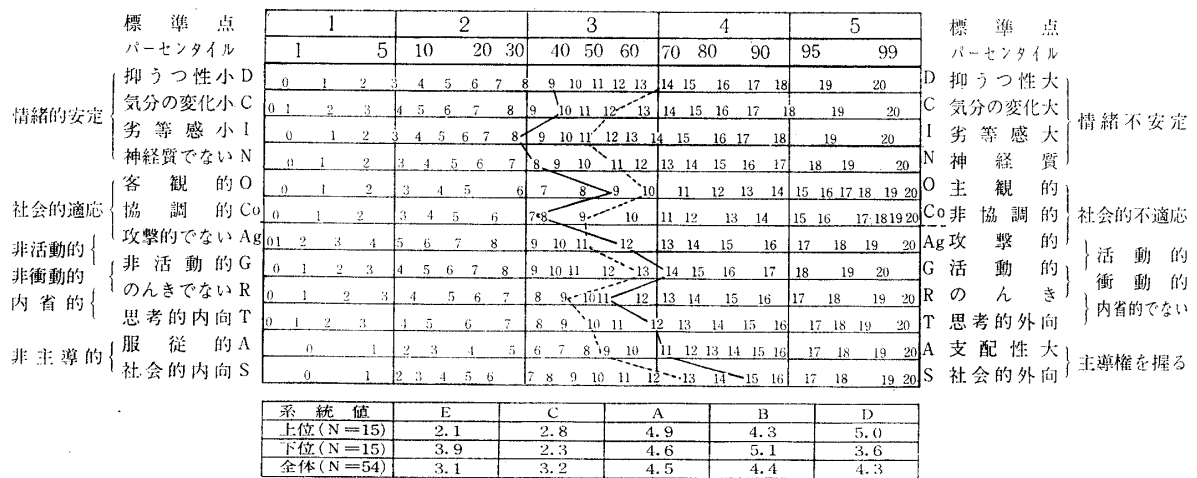


図1 Y-G性格検査プロフィール(高校平均) ー上位群平均
---下位群平均

授業時間の割愛のやむをえないこともあって、多くの協力を得られず調査人員も400名足らずに終わった。

結果および考察

1. 糸結びと性格特性との相関関係

中学・高校・大学とそれぞれのグループにおいて、性格特性得点と糸結び目数との相関関係

表2 糸結びと性格特性との相関関係

学 校 種 別	中 学						高 校				大 学			
	1		2		3		1		3		1		2	
学 年	1		2		3		1		3		1		2	
人 数	28		38		44		39		15		37		44	
糸 結 び 目 数 (平 均)	21.2		18.6		22.1		21.7		35.8		22.9		30.5	
項 目	相 関 係 数	標 準 偏 差	相 関 係 数	標 準 偏 差	相 関 係 数	標 準 偏 差	相 関 係 数	標 準 偏 差	相 関 係 数	標 準 偏 差	相 関 係 数	標 準 偏 差	相 関 係 数	標 準 偏 差
X 糸 結 び 目 数		5.99		4.38		5.42		5.16		6.82		4.46		6.18
D 抑 っ つ 性 小	0.01	5.67	0.10	5.49	-0.04	4.37	-0.23	4.77	-0.57*	4.84	-0.34*	5.10	0.00	5.07
C 回 響 性	0.02	4.02	0.00	4.85	0.22	3.72	0.10	3.88	-0.16	3.99	-0.16	4.90	-0.06	5.16
I 劣 等 感 小	0.03	4.80	-0.04	4.46	0.23	4.66	-0.16	5.65	-0.20	4.14	-0.22	4.64	0.01	4.58
N 非 神 経 質	0.08	5.12	0.04	3.93	0.12	4.59	-0.12	4.58	-0.26	3.86	-0.32*	4.09	0.00	4.64
O 客 観 的	0.07	4.56	-0.06	4.07	-0.02	3.66	-0.04	3.10	-0.38	3.85	-0.36*	3.51	-0.07	4.35
Co 協 調 的	0.05	5.23	-0.26	3.92	0.03	4.12	0.00	3.80	-0.45	2.37	-0.13	3.70	-0.00	3.48
Ag 非 攻 撃 的	0.26	4.49	-0.12	3.68	0.03	3.59	-0.30*	3.65	-0.04	3.68	-0.13	3.82	-0.26	4.27
G 非 活 動 的	0.20	4.35	0.21	4.10	0.16	3.92	0.25	4.03	0.26	3.31	0.16	4.00	0.15	3.59
R 非 衝 動 的	0.10	3.60	0.05	3.17	0.15	3.40	0.28	3.50	0.14	3.51	-0.05	4.00	0.03	4.01
T 思 考 的 内 向	0.01	4.26	0.09	3.97	-0.08	4.56	0.15	3.66	0.26	4.58	0.45*	4.08	-0.12	3.94
A 服 従 的	0.15	4.75	0.12	4.08	0.05	3.83	0.14	4.76	0.28	4.22	0.10	3.97	0.08	4.67
S 社 会 的 内 向	0.27	5.15	0.14	4.29	0.09	4.31	0.40*	4.12	0.12	3.85	0.19	3.38	0.06	4.00
DCIN 情 緒 安 定	0.04	17.81	-0.04	15.75	0.15	14.25	-0.14	15.38	-0.35	14.76	-0.30*	15.81	0.06	18.13
OCoAg 社 会 的 適 応	0.10	11.91	-0.21	8.98	0.06	8.42	0.12	7.82	-0.44	6.21	-0.30*	8.61	-0.14	9.33
A 平 均 型	0.01	2.38	0.12	1.93	-0.09	1.92	0.13	2.19	-0.44	2.33	-0.47*	2.42	-0.24	1.90
B 不 安 定 ・ 不 適 応 型	0.22	2.03	-0.00	2.26	0.23	2.33	-0.02	2.41	0.02	1.37	0.07	2.21	0.07	2.17
C 安 定 ・ 安 定 適 応 型	0.15	2.54	-0.13	1.69	-0.14	2.12	-0.13	1.87	0.45	2.20	0.41*	2.48	0.13	2.25
D 安 定 ・ 適 応 型 ・ 平 均 型	0.01	5.33	0.10	2.55	0.01	2.66	0.14	2.71	0.47	3.00	0.45*	3.02	0.12	2.48
E 不 安 定 ・ 不 適 応 型 ・ 内 向 型	0.02	2.57	-0.18	2.69	0.08	2.53	-0.24	2.83	-0.16	2.58	-0.14	1.17	0.05	2.20

は、表2に示す通りである。中学生においては何れの項目にも顕著な相関はみられなかったが、これは中学校は義務教育であるので、学業成績・性行ともに著しく個人差があるためにこの結果がでたものと思われる。

高校では、抑うつ性・攻撃性・社会性に高度な相関を示している。(表1・図2)

また大学1年生では、思考性に1% (図3), 抑うつ性・神経質性・客観性・情緒安定性・社会的適応性において5%の危険率で、負の相関を示している。(表1・図4) 即ち得点の小

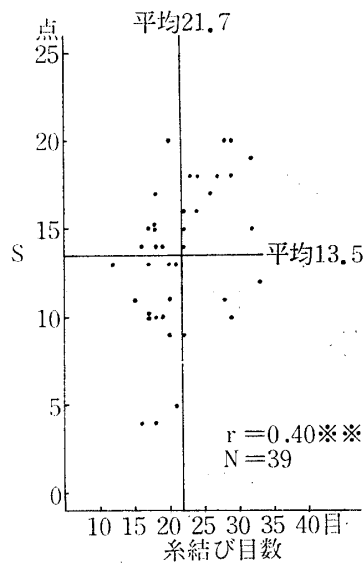


図2 社会性と系結びの相関関係 (高1)

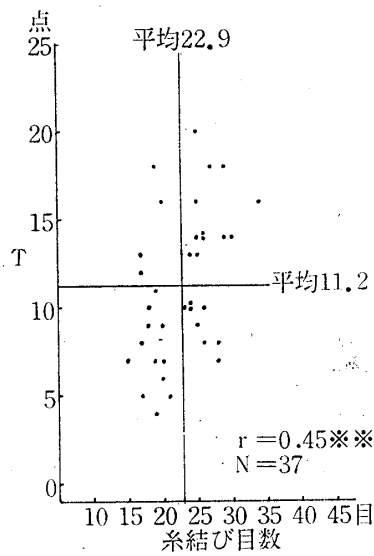


図3 思考性と系結びとの相関関係 (大1)

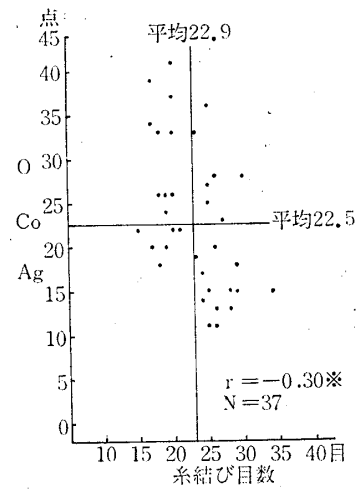


図4 社会的適応性と系結びの相関関係 (大1)

さいほど図1の左側の各項目の性格に近く、また得点の大きいほど右側の項目に近い性格といえる。

系統値においては、表2に示すように技能のよい者は、平均型(A)、安定・適応・外向型(C)、安定・適応又は平均・外向型(D)など何れも5段階評価の中以上の型で高い相関を示している。

2. 上位・下位群の性格特性について

表3 性格特性における上位群下位群得点差 $\text{上位} > \text{下位}$ 、 $\text{上位} < \text{下位}$

項目	小男	小女	中	高	大	項目
I 劣等感小・自信あり	0	<0.9	<0.7	<0.6	<1.9	くよくよする
N 神経質でない	<2.0	<1.2	<0.2	<2.9	<1.9	いらいらする・神経質
D 抑うつ性小・朗か	<2.5	<0.7	<3.0	<3.9	<2.7	陰気・非観的
C 回帰性・気分変化小	<3.0	0.9	<2.4	<3.2	<2.7	感情的・気が変り易い
Co 協調性	<1.7	0.9	<1.3	<1.6	<1.3	不満多い・不信性
O 客観性あり	<2.0	1.4	<2.7	<0.9	<3.2	空相性・過敏性
G 一般的・活動性おそい	<3.2	0.5	<2.5	1.4	2.1	仕事が速い・ほがらか
A 支配性なし・引っこみ思案	<0.8	2.4	1.5	1.8	2.0	支配性あり・会グループの為働く
S 社会的内向	<1.5	1.0	1.6	2.7	1.3	社会的外向・人との交際好む
T 反省的・考えこむく甚	<2.5	<0.5	1.7	1.4	1.1	思考的外向・非熟慮的
R のんきでない	0.3	2.1	1.0	2.3	<0.5	のんき・気軽・活発
Ag 非攻撃的	<3.2	1.0	0.6	1.1	<2.8	短気・人の言うことをきかぬ
DC 情緒的安定	<5.8	<2.2	<4.6	<10.5	<8.4	情緒不安定
G 非衝動的	<3.2	2.0	3.0	10.4	1.8	
A 非主導的	<1.8	3.0	3.1	4.6	5.0	主導権を握る
Co 社会的適応	<5.4	2.8	<1.2	<3.3	1.5	社会的不適応
Ag 非活動的			2.3	2.6	<1.2	
R 内省的			2.7	2.7	<0.6	非内省的

糸結び目数即ち技能の上位群・下位群の性格特性の関係について考察を進めるために、小学生男子・女子・中学生・高校生・大学生の5グループについて、それぞれの糸結び目数の多いものから25%の者を上位群、少ないものから25%を下位群として、上位・下位の性格の比較を試みた。(表3)

劣等感・神経質・抑うつ性については、何れのグループも同傾向を示している。即ち技能の上位の者は、抑うつ性小で朗らかであり、神経質でなく劣等感小で自信がある。回帰性・協調性・客観性については、小学生女子を除き、何れも上位群の者は気分の変化小で強動的であり客観性がある。小学生女子は僅かの点の差であるが、これらと反対に上位の者が不満多く、空想的で過敏性になっている。また小学生男子のみ異なる傾向を示しているのは、活動性・支配性などで、他のグループの者は、上位群は活動的で朗らかで支配性があり、社会的外向であるのに、男子はこれらの性格が下位群の者にみられる。小学生男子の場合、活動的で朗らかでグループのために働く者という、やや落ちつきも失うので、このような者より無口で引っ込み思案で社会性内向の者の方が糸結びのように根気のいる仕事に適しているのではないかと思われる。

以上のように小学生にバラツキの多いのは、未だに技能の定着度がなく発達過程にあり、身心ともに未発達の結果と思われる。

つぎに因子の組み合わせによる性格をみると、上位群・下位群の差が顕著に出ているのは情緒安定性であり、何れのグループも上位群が安定している。攻撃性については、大学生のみ他グ

表4 性格因子と糸結び(上位群 下位群)の比較(得点平均)

学校分類	DCIN			OCoAg			AgG			GR			RT			AS		
	上位	下位	平均	上位	下位	平均	上位	下位	平均	上位	下位	平均	上位	下位	平均	上位	下位	平均
小学男 N=13	10.5	16.3	13.1	9.1	14.5	13.0				11.3	14.5	12.5				10.0	11.8	8.5
小学女 N=13	12.2	14.4	12.3	11.0	8.2	11.2				12.5	10.5	11.6				10.7	7.7	8.5
中学 N=27	34.2	38.8	33.6	27.1	29.9	28.4	23.1	20.8	20.2	25.0	22.0	22.9	24.4	21.7	22.6	26.5	23.4	25.3
高校 N=15	37.1	47.6	39.6	27.7	31.0	29.1	23.7	20.1	21.3	32.3	21.9	23.4	25.8	23.1	24.3	27.1	22.6	23.9
大学 N=20	31.2	40.8	33.3	22.9	21.4	22.0	21.7	22.9	22.0	24.8	23.0	23.5	20.8	21.4	22.1	25.7	20.7	22.7

ループと異なり、下位群の者がのんきで活発・攻撃的である。衝動性・主導性は小学生男子を除き、何れのグループも下位群の者が非衝動的で非主導的である。

3. 系統値と技能の関係

表5 系統値と糸結び(上位群・下位群)の関係(得点平均)

系統値	小 男		小 女		中 学		高 校		大 学	
	上位	下位	上位	下位	上位	下位	上位	下位	上位	下位
E(左下がり型)	3.0	< 4.3	2.5	< 4.1	12.8	< 18.4	10.8	< 18.5	16.2	< 21.2
C(左寄り型)	5.1	>> 3.6	3.5	<< 4.0	18.7	<< 19.3	14.7	>> 11.6	26.9	>> 17.5
A(平均型)	4.6	5.0	5.5	4.7	22.3	22.1	25.9	23.6	34.6	47.8
B(右寄り型)	2.2	<< 3.7	3.0	<< 3.3	20.8	>> 19.9	22.4	<< 26.4	31.5	<< 34.0
D(右下がり型)	4.2	>> 2.6	4.0	>> 3.2	25.5	>> 20.4	26.2	>> 18.5	40.8	>> 29.5

表5は系統値の平均点を示してあるが、Eは「左下がり型」ですべて下位群が高い点になっているが、社会的不適応が下位群に多いことを示し、またD「右下がり型」は反対に上位群が高い得点を示しているので、上位群に適応型が多いことになる。

4. 糸結びと性格タイプの関係

これらの系統値をもとにして性格タイプに分類したものが図5である。中学生を例にとると不安定消極型は上位群が3.7%、下位群が25.9%、安定積極型は上位群33.3%、下位群25.9%であり、また高校生においても同傾向を示し、不安定消極型は上位群においては0%になっている。いわゆるクラスで問題にされている生徒は下位群に多くみられる。

以上の結果を性格検査のプロフィールに示したのが図6（小学生）、図7（中学生）である。何れも上位群を実線、下位群を破線で表わし、それぞれの平均点を結んであるが、協調性まで

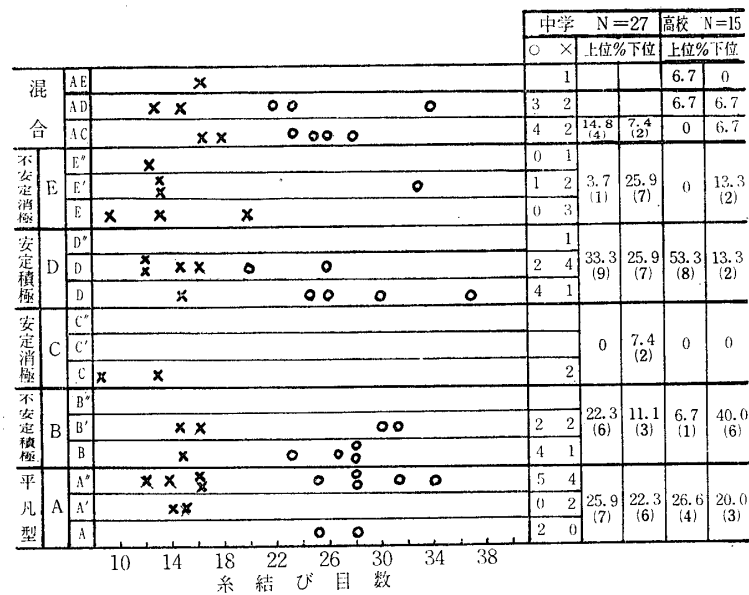


図5 糸結びと性格タイプの関係（中学）

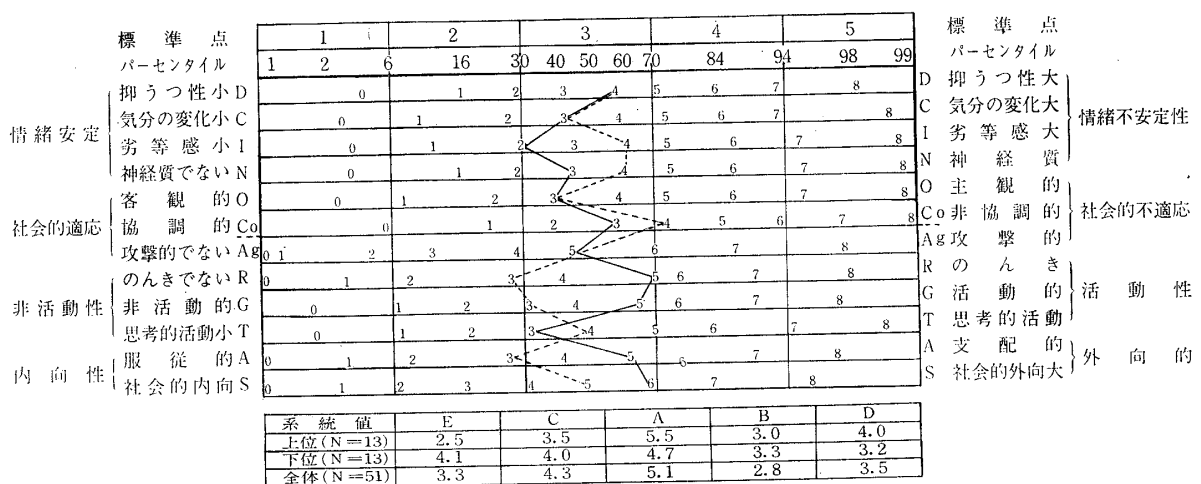


図6 Y-G性格検査プロフィール（小女平均） — 上位群平均 --- 下位群平均

は上位群の点が低く、左側にあげた性格に近く、またそれ以下の項目については、右側の性格に近いことになる。これは平均点であげたので、つぎに上位群・下位群のなかの事例を図8、図9で示す。これによると明確に上・下の性格の差が出ている。

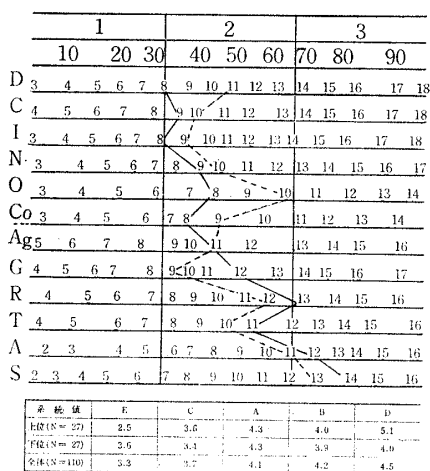


図7 Y-G性格検査プロフィール (中学)

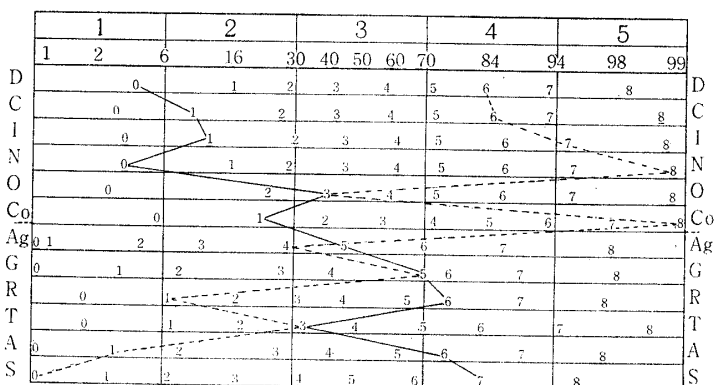


図8 上位群・下位群の性格プロフィール (小女事例)

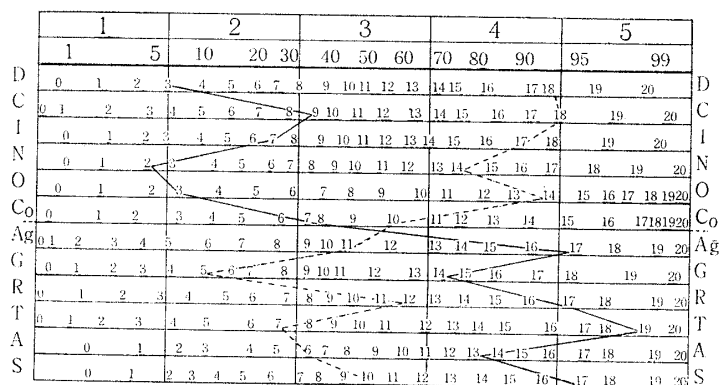


図9 上位群・下位群の性格プロフィール (高校事例)

ま と め

以上をまとめると、被服技能即ち糸結び目数と性格・特性の間には、数項目に高度な相関がみられた。また技能の上位群と下位群の者の間に性格の相違が認められた。なかでも、劣等感小で自信がある、神経質でない、ほがらか等の特性が上位群の者に現われている。また劣等感大、いらいらし神経質であるもの、非観的で陰気などの特性は、小学・中学・高校・大学すべて下位群の者に多く現われている。この傾向は前回調査のクラス担任の所見による性格と一致している。また情緒安定度は上位群・下位群の間に相当な差がみられた。即ち下位群の者は情緒不安定の傾向が多い。

性格のパターンは、最も理想的な性格の持ち主で社会的適応もよいとされている安定積極型は上位群に多く、また反対に情緒不安定、非活動的で最も問題とされている不安定消極型は下位群の者に多く見られた。これらの多くは学業成績が悪く、クラスで問題視されている。

小学生は、のんきさ、協調性、回帰性、支配性など多くの項目で男女の差が現われ、不安定積極型は女子は上位群のみに、男子は下位群の者であった。これらは糸結び技能の未知の者が男子に多くあったのが要因の一つではないかと思われる。

以上の調査により、技能と学業成績・性格の間に関連がみられ、特に技能の下位群の者に成績・性格ともに問題のあるものが多くある。これらの者に技能に興味をもち、練習をして上達

をはかることにより自信をもたせ、知能性格の向上をはかる一助にしたい。今回は実験者数も少なかったので、今後校数・人数を多く調査すると同時に、また知能が水準より低い者の技能の発達状態をも調査したいと考えている。最後に本調査に御助言を賜った奈良女子大学家政学部長花岡利昌教授ならびに各学校の被験者の方々に深く御礼を申し上げます。

参 考 文 献

- 藤沢キミエ，太田昌子：家政学研究，6，14～20（1959）
太田昌子，藤沢キミエ：家政学研究，7，44～49（1960）
太田昌子，藤沢キミエ：家政学研究，12，12～15（1965）
橘覚 勝：手—その知恵と性格 誠信書房，129～130，114（1976）
荻野千鶴子：名古屋女子大学紀要，23，69～74（1977）